

〔論文〕

## 日中の死生観の比較研究考

黄 名 時・何 偉

名古屋学院大学/安徽财经大学

### 要 旨

日中間で文化的価値観や文化的観念・文化意識において違いがあることは夙に指摘されるところである。小論では、両者の観念の相違が相当に認められるものの一つとして日中の死生観を取り上げ、双方の意識の比較研究を通してそれぞれの文化的特質を考究する。ここでは具体的に死と生に関して、歴史的生存観をはじめ、衣食住などを考察し、つづいて死に対するそれぞれの考え方を分析する。祭祀や墓地に対する意識、死生観を形成する要因、特に仏教と伝統文化からの影響についても論じる。

キーワード：死生観，生存観，祭祀と墓地，伝統文化と仏教

## A comparative study on the concept of life and death in Japan and China

Meiji KOH, Wei HE

Nagoya Gakuin University/Anhui University of Finance and Economics

## はじめに

死生観という問題はどのような文化においても、もっとも基本的な問題であると考えられる。それは世界観の潜在的動機でもあれば人生観の根本でもある。二十世紀以来、或は西洋の現代哲学においても、或いは文学や芸術においても、いずれも死に対する関心や不安を表現した内容がみられる。ある一つの文化を真に理解するには死生観から始めなくてはならない。日中両国の文化は同じ源に基づくものではあるが、死生観においては、はなはだ異なるところがある。例えば死に対する見方、自殺に対する態度や姿勢などは殊に異なる。小論の研究の意図するところは、日中両国の死生観を分析し比較して、その相違ならびに要因を掘り起こし深く文化の深層に迫り、以て日中間の双方の文化理解を真に深めんとせんがためである。

## 一 「生」に対する考え方

### (一) 神話に見る日中の生存観

#### 1. 中国人の現実主義的生存観

西洋神話と日本神話において人間が神様によって生み出されるという伝説と異なり、中国の神話では女娲が中国人を泥で作ったものであるという。このような観点からすると、中国人は、自分たちが神様と血族の繋がりがあるという理想主義的な観念はもっていない。こうして作られた中国人が、数千年の生活の中で貫いてきた信念は、現実主義であれということである。中国人が現実主義に至った背景は、神話体系にも現れている。天上界では玉皇大帝をはじめとする神様が支配し、その支配のルールはほとんどこの世と同じで、皇帝、大臣と様々な官吏を揃えている。中国人の神様を崇拝する前提には、神様が生活の中の色々な問題を解決してくれるから、ということがある。かくして、中国の神様には現実的な機能が種々具わった。例えば、福祿寿星、送子観音、財神、灶王爺、月老などがそれである。すなわち、中国人にとって、現実に目で見ることができ、知覚で知ることができ、聴覚で聞くことができ、そして味覚で味わうことができる世界がもっとも大切なものになる。中国人が生きる世界は、あの世でも天国でも過去の世界でもなく、現世が中心となる。キリスト教の天国思想や仏教の来世思想は中国の人々にとっては受け入れがたいものであり、関心すらない。

中国人にとって真剣にこの世で生きることが最も大切なことである。したがって、生まれたから仕方がなく生きるというような消極的な生き方は許されない。どのような困難に遭っても、どのような難しい立場に立っても、「命該如此」「没法子」と言いながらも、是が非でも生き抜き、決して自分勝手に死を求めないというのが中国人の生き方であるといえる。このような姿勢や生き方ゆえに中国人は積極的に生き甲斐を追求し、それは「福祿寿」を追い求める価値観や考え方に具体的に現れている。

## 2. 日本人の生存観の四つの特徴<sup>1)</sup>

日本の最古の史書『古事記』『日本書紀』によると、伊邪那岐、伊邪那美の二神が国を生み出し、人間が生活する上で必要な自然と物を作りだし、人間の命も生み出したという。日本人は神の子として、神との血縁関係を持ち、神を祖先として尊敬しながらも神を超越した絶対者と考えることもなく「人間と神との合一」を信じている。さらには、人間と自然とは合一するものであるという考え方に変わり、自然と対立せず、自然に順応するようになった。これは日本人の生存観の第一の特徴である。

日本人の生存観の第二の特徴は「記紀神話」にも載る。伊邪那岐、伊邪那美の二神が国を生み出す過程において、女神の主動で生んだ蛭子と淡島が発育不良のために捨てられ、改めて男神が主動した後に完全な国の誕生に成功した。このように日本の神話においても、神であっても失敗や、過ちを犯し、苦悩するように、日本人の生き様において、失敗や誤りや不幸は必然的なことであると考えられる。ここにも明らかに、日本人の慎重かつ単純、素朴な生きざまが現れている。

第三の特徴は、長寿よりも美しさのほうを重視することである。天孫瓊瓊杵尊は高天原からの降臨の際、大山津見の神の美しい次女・木の花咲耶姫を見染め、結婚を申し込んだ。喜んだ大山津見神は姉の磐長姫をも添えて嫁に出した。ところが、姉の磐長姫が醜かったため、瓊瓊杵尊は姉を送り返し、美しい妹だけを娶った。姉は磐石のように長寿の子を生む姫であり、妹は美しい木花のようなはかない子を生む姫であった。『日本書紀』では、姉は恥じ恨み「この世の人は木の花のように俄にうつろい衰え去るだろう」と言ったという。このように日本人は神話の時代からすでに長命よりも、短命で儚くても美しいものを求めたいという気持ちが強いようである。

第四の特徴は、人間性の善と悪との共存である。「記紀神話」では、伊邪那岐が黄泉の国から戻る途中、中遊で体を洗ったときに悪の神である禍津日神を生んだという。そして、禍津日神の荒びを正し和するために、直日神を生んだという。ここにおいて、日本人は、絶対的な善と悪はなく、人の身体には善と悪が同時に併存できるものと考えに至る。さらには悪事を働いた人間であっても祭祀などによってその悪を消し去ることができることを認めている。このような善悪共存の考え方は中国人のそれとは明確に異なる。例えば、武家時代には、一族が滅亡する際に、心優しい母親が家族の名誉を守るため自分の手で我が子を殺めた。中国人の考え方では、「虎毒不食子（虎はどんなに悪くても、我が子を食べることはない）」、すなわち母親としての「善」と殺人者としての「悪」の二者は、どのようにしても一人の人間の中に統合することはできない。

## (二) 日常生活の中における生存観

### 1. 中国人の「福祿寿」の追求

中国古代においては、子供、とりわけ男子が多いことが「福」の象徴であると考えられた。農業社会では男子は主な労働力であって、家族が繁栄するか否かのカギを握る。中国の伝統的な大家族制の社会では、男子家族の多寡によって一族内で有する権力が異なる。「不孝有三，無後為大<sup>2)</sup>」という言葉

1) 『日中の死生観比較考』清水徳蔵。アジア研究所紀要17参照。

2) 孟子・萬婁上：親不孝なことには三つあり、後継ぎが無いことがもっとも大きい。

葉は、男子を産む重要性を明確に現している。丁秀山はその著『中国の冠婚葬祭』の中で、「中国人は昔から人生の幸せとして、福祿寿、多子多福、財産、および長寿を求めてきた。とくに死亡率の高かった時代には子宝はこのうえない幸福として考えられていた」と述べている。このような「子供は多ければ多いほどよい」という考え方の影響によって、中国の出生率は常に高いレベルを保持し、今日のような世界一の人口大国に至った所以である。

現実主義の第二の哲学は、金銭に対する欲望である。厳しい自然、歴史、社会の環境の中で、頼りになるのはお金だけなので、中国人の金銭に対する執着は人生の目標や人生の価値そのものになる。このようにして手に入れる財貨や富貴は「禄」と呼ばれる。孔子も富貴を排斥することなく、「富而可求也、虽執鞭之士、吾亦為之。如不可求、从吾所好<sup>3)</sup>。」と述べている。さらに孔子は、富貴は法律と道徳に合致しなければならないと強調し、「不義而富且貴、於我如浮雲<sup>4)</sup>」と述べている。中国古代では他にも、「高官厚禄」という言い方がある。すなわち、官吏になれば豊かな俸禄がもらえるということである。このため、古代においても現代においても中国人は官吏になることに強い関心をもっている。かくして中国社会の中で「官本位」という現象が起きることとなり、それは今日も続いている。

現実主義の第三の哲学は長寿である。福と禄がある上にさらに長い寿命があれば、現世でゆつたりと楽しむことができる。現世のみを認める中国人にとっては、長生きすることが絶対的な願いなのである。西周の青銅器には「万年眉寿」「眉寿荒考」という長寿を願う金文の文字が鋳込まれている。このような文字が青銅器に刻まれたのは、天に祈り長寿を賜らんと願ったからにはかならない。中国の統一を成し遂げた秦の始皇帝が長寿を渴望し、不老不死の仙薬を求めて徐福と三千人の少年少女を海外に遣わした伝説はよく知られている。漢の武帝、淮南王、明の嘉靖帝なども長生の願いを叶えようと懸命に仙薬を精錬した。民間においても、「好死不如頼活着」「人生如白駒過隙」「人生苦短<sup>5)</sup>」というが如く、人生の短さを嘆き、生き甲斐を追求する諺が伝えられている。伝説における不老長生の仙人も、中国人の長寿に対する羨望および敬意を表したものだといえる。このような願いにもとづいて、中国の伝統文化においては養生の道が求められ、人生をよりすばらしく、より価値あるものにするのが中国人の一貫した追求となっている。例えば、太極拳、豊かな飲食文化、「薬補」「食療<sup>6)</sup>」なども養生の道の表現なのである。

## 2. 日本人の衣食住行

日本人の生存観を示す四つの特徴は日常生活の様々な面に現れている。中国人の「福祿寿」を追い求める享楽主義の生存観とは異なり、日本人は禁欲主義という素朴な生存観をもっている。日本人は、人生は無常であり、享楽を生き甲斐とするのではなく、物質的欲望は抑えるべきものだと考えている。

- 
- 3) 論語・述而：富みというものが追求してもよいものなら、鞭をとる露払いのような賤しい役目でも私は勤めようが、もし追求すべきでないなら、私の好きな生活に向かおう。
  - 4) 論語・述而：道にはずれて金持ちになり身分が高くなるのは、私にとっては浮雲のように、はかなく無縁なものだ。
  - 5) 「壮麗な死よりも我慢の生」「人生は白駒が隙を過ぎるように速い」「人生の短さに苦しむ」の意。
  - 6) 漢方薬を栄養剤とする。食べ物を薬とする。

仕事においては、中国人のだらしなさと欧米人の「仕事と休暇の両立」という考え方と異なり、日本人は懸命に働く。毎週六日間、毎日10時間以上も勤務する人が数多くおり、有給休暇の利用率は低く、「過労死」という現象も広く見られる。日本の一万社の企業と二万人のサラリーマンに対する調査によると、正社員の残業が月に「80時間以上100時間未満」の企業は全企業の11%を占めており、「100時間を超える」企業は12%を占めている<sup>7)</sup>。中国では、「定年延長」の議論がつづいているのと比べ、ほとんどの日本人は自分の意志で70歳定年というのを受け入れている。これは中国人にとっては理解しかねることに映る。

日本人の欲望に対する抑制は、衣食住行など多方面に現れている。日本人の美学的観点からすると、華麗なものを好まず素朴な「禁欲系」の色調を好む。服装を例にとるならば、日本人の中ではブラウン、白、黒などの色合いに人気がある。世界的に有名な衣料や日用品ブランドのユニクロや無印良品も簡潔明快で、質素な色調をブランドの特色としている。これが世界における日本の代表的なイメージとなっている。

食生活においても日本人は高い望みをもっていない。古代において大権力を有する将軍や大名でさえ一日三食ともご飯と魚、漬物、味噌汁にすぎない。山海の珍味を求める中国の皇帝や貴族と比べ、ずっと質素で素朴である。今日の日本社会においても素朴な飲食文化が深く根付いている。もとの自然のままの味覚が追求されて、調味料の使用は限られ、刺身、野菜などはそのまま生で食べることも多い。但し近年、日本の「だし」などのうま味調理が見直され、世界遺産にも和食が認定されている。食材本来の味を生かすことが日本食の基本的な考え方であり、中国のそれとは異なる。中国料理の「五味調和」という理念や「食不厭精、膾不厭細」<sup>8)</sup>というような複雑な作り方とは全く異なっている。例えば四川料理の山椒や唐辛子など刺激性の調味料を多く使う作り方は、もともとの日本料理には見あたらない。日本人が受け入れた四川料理のマーボー豆腐は元の味とは全く異なるものになっている。

「食色性也」<sup>9)</sup>と言われたように、「食」と「性」は人間として最も基本的な欲求である。日本人は食生活だけでなく、性生活においても節制をしている。『Give and receive—2005 Global sex survey result Durex』によると、調査対象の41カ国の中で、日本人は性生活の回数が年に45回と最下位にあり、満足度も24%で下から2番目であった。41カ国の平均回数は年103回で、平均満足度は44%である<sup>10)</sup>。すなわち、日本人は平均8日間に1回のみ性生活があることになる。一カ月間に性生活が一回もない夫婦も多数いる。そのわけを質せば、外見や表面上は仕事のストレスであるとか、過労などが原因であるとか言うものの、実は多かれ少なかれその質素な生存観や素朴な生き方が影響しており、ある意味、雰囲気的にも禁欲的な考え方をもっているのである。

7) 厚生労働省、平成28年版 過労死等防止対策白書。

8) 論語・郷党：飯はいくら白くとも宜しく、なますはいくら細かくても宜しい。

9) 孟子・告子上：飲食と性は人間の本性である。

10) <https://wenku.baidu.com/view/6a616f7f10a6f524ccbf85f7.html>

## 二 「死」に対する考え方

「死」に対する観念には様々なものがある。例えば死亡、葬儀、祭礼、自殺、墓地、来世、地獄などである。ここでは、「死と生との関係について」、「自殺についての考え方」および「祭祀と墓地について」の三つの問題を取り上げて考察する。

### (一) 死と生との関係について

#### 1. 中国人の「応報論」

死と生とは如何なる関係にあるのか。死は生の終わりであるのか延長であるのかの問いは、死生観における核心的な問題だと思われる。中国人の考え方では、人は亡くなっても生前の負債や責任がいっさいなくなるということはなく、応報というものがある。悪人は死んだ後も、来世において必ず応報がある。中国人にとっては死んだあとの来世で神や仏になるのではなくて、生まれ変わるのである。現世における人間の善悪の烙印は、後世においてその応報が何百年あるいは千年続く恐れもある。中国の古典名著『聊斎志異』には、生前に悪事を働いたことで死後に応報を受けるといった物語が多数収録されている。ほかの昔話にも、極悪の罪人が死後地獄に行き、後世何代にもわたって牛馬となり懲罰を受けるといった言い伝えが多数ある。

中国には「蓋棺論定」という言葉がある。棺桶の蓋を閉めた後にはじめて死者に客観的な評価を与える、という意味である。すなわち、死は終わりではなく、死んだ後に歴史的な評価を受ける。良い評価を得られれば無論よいが、悪い評価を付けられると、死後も批判を受け続けることになる。宋王朝の民族的英雄の岳飛と奸臣秦檜はその典型的な例である。宰相秦檜は、金国との講和のために岳飛を中傷し殺害した。しかし、歴史は公平である。後世の人々は抵抗を主張した民族英雄を褒めたたえ、降伏を主張した秦檜を売国奴と呼ぶ。今日においてさえも秦檜の墓前に線香や蠟燭や花を供えるどころか、常に痰を吐かれる。墓碑もそこを通る人々によく蹴られる。これとは反対に、岳飛廟は杭州の郊外に莊嚴に建てられ、杭州を訪れる観光客のほとんどがそこへ墓参りに行く。そして、岳飛の墓の横に立てられた秦檜夫婦の跪く像に対して、観光客がそばに置かれた鞭を取って二人を叩く。古代の中国において、死者の遺骸を墓の中から引きずり出して侮辱する例は枚挙にいとまがない。

#### 2. 日本人の「免罪論」

日本人は死をもってすべてを帳消しにできると考える。生前の罪業は死後取り除かれるので、死をもって謝罪すれば以前の因果はなくなると考える。日本の神話体系のなかでは中国の陰曹地府や閻羅王のような役割も欠けており、死後において生前の善悪を清算し処理する過程もない。このため、日本の歴史上、世に名立たる悪人も神社に祭られる。例えば、足利尊氏、石川五右衛門、吉良上野介、道鏡和上などがそれである。現代で最も典型的な例としては、東条英機などのA級戦犯を祭る靖国神社が有名である。政治家の靖国参拝は、中国においては先の大戦の被害者中国人の感情を傷つけるものだと考えられている。一般の日本人が靖国へ参拝に行くのは、なにも軍国主義者を支持し懐かしむわけではなく、善人であれ悪人であれ死後はすべてを水に流す、という考え方をもっているからなの



である。これについては、応報論をもつ中国人にとってはなんとも受け入れ難いところである。

## (二) 自殺についての考え方

### 1. 中国人の「儒家忠孝観」

現実主義や福祿寿などの価値観の影響の下、中国人は命を大切にし、自分勝手に命を投げ捨てることはしない。中国人の考え方では、生というのは物質を享受し、利益を獲得し、目標を実現するための基本的条件となる。それに反して、死は上述のすべてが消え去るという意味である。死は自然界のもっとも厳しい懲罰であって、生命こそがすべての前提であると中国人は考えている。二度とない現実的な生命であるからこそ、この世に生を受けた人間は命をもっとも大切にし、死を拒絶することが人間の本能だと考える。たとえ死なざるを得ない時であっても、中国人は単に死そのものを追求することはなく、死の社会的価値に注目して選択する。孔子が「殺身成仁」、孟子が「舎身取義」と見事に説いたように、社会的歴史的観点から個体の生命を考察し、社会的意義にもとづく永遠と不朽を追求するのである。「死有輕於鴻毛、有重於泰山」<sup>11)</sup>「朝聞道、夕死可矣」<sup>12)</sup>という言葉もこのことを表現している。国を憂いて民を憂い、石を抱いて川に身を投げた屈原や、侵略に直面して敵に屈しない文天祥も中国人に崇拝される英雄である。彼らの死が人々の尊敬を受ける理由は死そのものではなくして、憂国憂民の情操と理想のために身を捧げたその精神を称えるからなのである。単に一個人のために自分の命を終えるならば、高い評価を得るどころか弱者の逃避的行為であると思われる。

中国人が自殺を肯定しないもう一つの理由は、身体の皮膚も髪も両親からもらったものであり自分勝手に捨てることは許されない、と古来の儒家思想により教え込まれているからである。「身体髮膚、受之父母、不敢毀傷、孝之始也。」<sup>13)</sup>とよく説かれる。また、『三国志演義』の中に次のような話がある。魏国の名将夏侯惇は矢が左目に刺さり、とっさに抜いたところ目玉がとび出した、すると、「父精母血、不可棄也」<sup>14)</sup>と言って、目玉を食べたという。また、忠君が要求される古代社会では、人々の身体すら主君に属するものである。古代では大臣が退職を願い出る時には、皇帝に対して「乞骸骨」ということをしなければならない。これは骸骨を故郷に埋葬させていただき、安らかな晩年を過ごさせていただきたいという意味である。自分の身体は自分に属さず、皇帝に属するからである。「君要臣死、臣不得不死」と言われた如く、君主から死を賜れば死ぬ以外に選択肢はない。

生と死に対する見方や考え方が客観的であり冷静であるために、中国人は日本人より自殺率がずっと低い。日本ではバブル崩壊によって倒産が多発し自殺した企業経営者が多数いるが、このようなことは中国ではほとんど見られない。「好死不如賴活着」というが如く、生活がいかに苦しくても、中国人は生きるほうが良いと考える。生活苦に耐えかねて自殺した人は同情されるが、理解は得られない。死ぬと一巻の終り、死と同時に人生目標のすべてが消え去るからである。

11) 漢書・司馬遷伝・報任少卿書：鴻毛より軽い死もあれば、泰山より重い死もある。

12) 論語・里仁：朝に道を聞きては、夕べに死すとも可なり。

13) 孝経・開宗明義：体の髪や皮膚も父母からもらうもの。

14) 父の精と母の血で育む身の一部分なので、捨ててはいけない。

## 2. 日本人の自殺観

周知の如く日本は世界一の長寿国であるが、自殺率も世界の中でずいぶん高いレベルにある。2008年に日本の警察庁が公表した「平成19年中における自殺の概要資料」によれば、2007年の日本の自殺死亡者数は33093人であった。すなわち、毎日100人弱が自殺をしたことになる。日本の人口は1.3億人であるが、人口計算によるその自殺率は凡そ10万人に25人になる。この数字はアメリカの2倍、イタリアとイギリスの3倍であり、主要先進国のなかでも最上位にあたる<sup>15)</sup>。

日本の文化の中では、人々は生と死に対して独特な理解の仕方をもっている。生が何よりも高いものであるとはせず、死も賛美を得られるものとする。日本人の死生観の意識においては、瞬間の美が好まれ、時の流れや生命の終止が淡々として取り扱われる。古来、桜の花が国花として絶えず日本人に好まれるのは、日本人が考える、日本人の理解する死生観に合うからであろう。桜の花は命が短く、華やかに咲いた後に一晩たてばすべて散る。このように少しもためらわず毅然とした潔さが日本人に好まれ、さらには死への信仰へと変わっていった。

日本人は来世に対して大きな期待を抱いているので、現世での生活がいかに辛く苦しくても人々は希望を死後の世界に託す。このため、この世で行き詰まると思い切って命を捨て、来世での幸せを求める。「心中」ということがその典型的な例として挙げられる。日本語には「心中」のほかに、「親子心中」や「主従心中」という言葉もある。文学作品の中には、若い男女が愛のために心中をする場面が多々ある。人形浄瑠璃大家近松門左衛門の名作『曾根崎心中』は、天満屋の遊女初と平野屋手代徳兵衛が愛情のために曾根崎の森で心中するという物語である。渡辺淳一の名作『失楽園』は、二人の中年男女が不倫の恋によって家族や社会から咎めを受けた後に、性愛の中で服毒心中するというストーリーである。ノーベル文学賞を受賞した後に自殺した川端康成は、「死は日本の美の源であって、芸術の最高の境地は死である」と述べている。ほかにも、芥川龍之介、三島由紀夫、太宰治などの有名人も、みな死に対して敬意を払っている。生と死の間には絶対的な距離はなく、人生の頂点を過ぎて生命そのものに期待がもてないのであれば、無理に肉体を生かすよりも、むしろ魂を帰らせて、心身の死滅する中で永遠の昇華と静寂を得られるほうがよい、とする。

一方、集団的な責任を負い、忠誠心を示す自殺もある。それは、個人の尊厳を守る自律的行為であって、個人の自由な権利でもあり、許されるべきものとする考え方である。ある意味において、自殺は日本の伝統であるといっても過言ではない。武家社会では、責任を取って主なる侍は腹切りをした。江戸時代中期の武士道の書『葉隠聞書』には、「武士道といふは死ぬことと見つけたり」と記している。武士はひとたび恥辱を受けたならば、復讐してから自殺しなければならない。有名な赤穂四十七浪士が主君の復讐を果たした後、国法に違わないようにと切腹をしたことは、今日も大いに称えられている。

### (三) 祭祀と墓地について

#### 1. 中国人の「死生分離観」

中国人は生と死の間にも、生者と死者の間にも厳格な境界があり、空間的にもきちんと分けられる

15) 警察庁生活安全局地域課、平成19年中における自殺の概要資料、2008年



べきものだと考えている。亡くなった人は転生する。この世に居残って己の子・孫と共に暮らすことはない。死者は生前の行為の善悪によって、もう一度人間に転生するか、或は畜生に転生するかして再度生まれ変わる。何かの原因で転生せずにこの世に残れば、家族を守るところか幽霊のような恐ろしいものになる。また、中国人は死亡、死体、葬式、墓地などは不浄かつ縁起でもないものであり、冥界と現世とは別々の世界であると考え。これゆえ、中国では葬儀への参列後、帰宅する際には燃盛るたき火の上を跨いで行かなければならない。これは死者の霊魂がついてくることを防ぐためである。中国人にとって、死者を埋葬する墓地は冥土に最も近く恐ろしいところであることから、中国では斎場も墓地も市街地から遠く離れている。農村の田舎においてすら、墓地は人里離れた遠い野原におかれる。ここに筆者（黄）の身近な例として宇治市の山麓に建てられた日本の華僑墓地を紹介しておこう。中国とゆかりの深い黄檗山萬福寺の境内には京都華僑墓地委員会の管理する共同墓地があり、遠く日本全国各地から多くの華僑が縁者や先祖御霊への参拝と供養に訪れている。

祭祀について言うならば、孔子のような著名な一族の家族を除き、ほとんどの中国人の家族は自分に近い親族、例えば父親世代、祖父世代のみを祭り、三代以上の祖先はほとんど祭らない。祭祀の儀式にも中国人の実用主義が現れる。通常は墓前において、紙で作った衣服、食べ物、車馬、お金などを燃やす。焼かれた物はあの世に送られ、亡くなった親族が地下の世界で使えるようにとの考え方なのである。

## 2. 日本人の「死生一体観」

日本人のなかでも仏教がその考え方のベースになっているケース、すなわち仏教徒である場合には、人は輪廻転生するものと考え。しかし一般に、日本人の死に対する姿勢と意識は中国人とまったく異なる。断絶的な観点から死を扱うのではなく、死を生の形体なき延長であると思なす。日本人は、人が亡くなった後に転生したり、死が生と生の間の過渡期であるとは考えず、死は生と両立するものであると考える。これは、「生死を超越し、死生一体となる」という死生一体観である。藤沢市の梶耳記念碑には、「海に不帰の客となった」という一言が記されている。また、一昨年、妻に死なれた歌舞伎役者の市川海老蔵氏は記者会見の折に、妻の死について「旅立ち」という言葉を用いた。以上に見る例は、いずれも死生一体観が日本人の心の中に深く入り込んだ表現であろう。ほかにも卑近な例として筆者（黄）の身近なところでは、お墓の石碑に「悠遠の 彼方で会わん いつの日か」の俳諧の律俳句が刻まれている。この碑文には、人は亡きあともまた再会したいという強い思いが込められている。さらに筆者の周りには、お骨をペンダントに仕込んだり、手提げで持ち歩いたりする例もある。亡き人はいつも近くにいるという考え方なのである。

日本人は、死者の霊魂は世間から遠く離れずに人々と永久に同じ時空にいると考える。現世と来世、生者と死者は近隣の関係をもつものである、と。亡くなった人の霊魂は家族と離れず、家もしくは近くにいるかもしれないという文化的信仰は、広く伝統・文化・習俗などの文化媒体を通して、気づかぬうちに人々の心の中に強く根深くとどめられ、人々の生活様式や人生観、価値観、倫理観などに大きな影響を与えてきた。

日本の墓地文化は死生一体観の典型的な表現だといえる。日本人にとって、死は生的一部分であり、

生と死の間に絶対的な距離や厳格な境界はない。こうしたことから、日本の墓地はお寺のほかに、居住区にも多数ある。さまざまな墓群が違和感なく民家の隣ないし大通りの脇に分布していて、空間的に「生死一如」という見事な雰囲気を作り出されている。テレビドラマの一場面で、独身の父親と暮らす十歳ほどの女の子が、よく学校から帰ってから家の隣の墓地へ行き、亡くなった母親に自分の勉強と生活のことを報告するシーンがあった。これに反して、中国では不吉不浄なものに染まらないようにと、通常、子供が墓地に近づかないようにしている。筆者（何）が名古屋で客員研究員として滞在していた時、住んでいたアパートの向かいに墓地があった。筆者の部屋から外を見やると、きちんと並んだ墓碑が目に入る。墓地は居住区に囲まれ、人々の日常生活の中に溶け込んで一体化しており、独特な人間の生活空間が出現していた。異なる文化背景から来た筆者にとっては、部屋の真向かいに墓地があるということはとても受け入れ難い。このような生と死の二つの極端なものが完璧に融合されている日常風景に、独特な「死生共生」の調和した共同体的文化の存在を感じたものである。加えて、このような文化は自ずと共同体からその縮図として家族というところに凝縮される。日本の伝統的な家庭では、通常、家のなかに先祖を祭る仏壇を置き供養を行う。祖先の魂を祭ることは祖先に対する恩返しでもあれば、生活の幸福と平安を祈願する手立てでもある。祖霊は家族の中心であるとともに、生活の当たり前の構成要素になっている。生と死は一人の人間の中で共生するとともに、家族内においても共生するのである。

### 三 死生観の形成要因の分析

以上の比較と分析を通して、日中間の死生観には実に相違があることが知られる。その差異が生じた原因を考察するならば、凡そ次の3項目に纏められる。

#### (一) 自然条件

##### 1. 恵まれた中国の自然環境

中国の国土は広大で、資源も豊かであり、自然条件がよいといえる。ほとんどの人は生存に適した広い平野で生活をし、国と民族の生存を脅かすような自然災害はあまり起きていない。自然に恵まれた中国人の死生観は、現実的かつ温和なものである。穏やかな生存環境の中に生きる中国人は生存上の心配がないため、基本的な生活が満たされれば、衣食住行についてより高い追求ができる。かくして、服飾文化、飲食文化、建築文化など中華の華やかな文化が誕生した。素晴らしい生活を実現したいと願うからこそ、中国人は命を大切に、長寿を得て生活を楽しむことを望む。生命がなければ、目標追求に関わるすべてのものがなくなる。したがって、現実主義的な中国人にとっては、死は恐ろしいものであり、また向き合わざるを得ないものである。

##### 2. 厳しい日本の自然環境

人間にとって、すべては自然界から賜ったものであるが、島国の日本にとっては、自然界の神霊はより大きな創造と破壊の力をもっているのである。中国と異なり、日本は地質構造の不安定な、気候

の差の大きい島国である。平野面積は小さく、国土の84%は耕作に適さない山地であり、降水量が多く、洪水、火山活動、地震、津波、台風など自然災害が起きがちである。古来、日本人は命も財産も危険と隣り合わせで、いつでもどこでも壊滅的状况が発生する恐れがある。自然の神の力と狭い国土の制約ということから、日本人は自然に対して感謝と畏敬の念をもち、自然と戦うとともに、深く自然を大切にしている。

自然条件の厳しさがゆえに日本人は素朴な生存観をもつようになった。すべてのものが自然の恵みであるからには、ほんの少しの贅沢や豪奢でも自然への不敬となる。生存が常に脅威にさらされる環境の下では、腹いっぱい食べることができれば、自然に感謝しなければならない。さらに贅沢に、おいしいものを求めるならば過分の望みを抱くことになる。このような生存観をもつことから、自然によって破壊された家が速く建て直せるようにと、家屋はできるだけ木造建築を主体に建てられる。飲食も服装も質素であり、素朴なものが追求される。自然界から多くの資源を得られない以上、日本人はより努力奮闘をする必要があるのである。

自然的条件が悪いことから日本人の民族意識の中では、生まれながらにして危機感および死生無常、禍福無常、盛衰無常などの無常観が生じることとなる。このような危機感と無常観は歴史の発展とともに、次第に日本人の死生観の一部を形成することとなる。さらには日本文化における虚無思想へと変化していく。『平家物語』や『方丈記』をはじめとする文学作品の中には、多かれ少なかれこのような思想の傾向が現れている。

この思想は、審美的観念において「物の哀れ」という一つの美意識として現れるようになる。「物の哀れの美」の真髄は無常という哀感や無常という美感であり、美の短さを称え、「瞬間美」から「永遠の寂しさ」を求めるところにある。古代の日本人は常に桜を人に喩え、桜の花の落ちる「瞬間美」を、すなわち死が人生の極致であるとして、生命の瞬間の輝きの中で永遠の静寂を追求する意識へと転換していく。このような「物の哀れ」の美意識は強く日本人の心の世界に影響を及ぼし、日本人の心の奥に深く入り込んでいる。「死は生命の最高の虚無である。虚無は精神の最高の浮遊状態であり、宗教と詩歌の境地に近い。ゆえに、死は精神的な美と靈魂の昇華を代表するものである。」という<sup>16)</sup>。

## (二) 仏教の影響

### 1. 中国仏教の「輪廻観」

仏教が伝来する以前の中国では、人々にとって死後の世界は現実世界の延長であって、人は死後の世界で生き返り、以前と同じ服を着て同じものを食べ、同じ馬車に乗り、現実の世界と同じ生活ができると考えられた。具体的な表現としては、死体を完全に保持保存するために、きれいな棺桶と土葬の様式を採用し、火葬、天葬、水葬など死体を壊す方式を拒否したということである。埋葬の際には、死体を腐らせないように口に真珠などを含ませ、死後の世界でも楽しめるようにと数多くの副葬品をも棺の中に納めた。秦の始皇帝陵をはじめとする古代帝王の陵墓は、生前の皇宮のごとく立派に建てられた。甚だしくは死後の世界で美女や召使いを保持するために、副葬品とともに生きた人間までも

16) 顔翔琳. 死亡美学. 上海: 学林出版社. 1988

殉葬させた。

仏教が中国へ伝来した後、中国の固有でない仏教教義の輪廻転生の観念が中国人に受け入れられ、国内に広く伝播した。昔も今も、中国の各地では乞食が、「来世のために、みなさん善行をしてください」と言う。すなわち、善行をするのは他人を助けるためではなく、自分の来世の幸福のためなのである。昔よく見る日本の乞食が「旦那さん、どうぞお恵みください」というのとは大きな相違がある。

## 2. 日本仏教の「無常思想」

日本の仏教は中国および朝鮮半島より伝えられたが、日本人の選択的な取り入れ方によって、インドや中国の仏教とは異なるものになっている。今日の日本では、和尚は素食をしなくてもよい、結婚してもよい、子供を作ってもよいというところは、中国の状況とまったく異なる。中国で広く流行する転生という思想は日本で広く行われているわけではない。なぜなら、生存環境の厳しさから「人生は苦しいもの」という感覚をもつ日本人には、さらに転生をしていくことに大して希望を抱かないからであろうと思われる。

仏教が日本に伝わったあと、元々あった自然神崇拜と祖先崇拜は仏教の教化を通して、日本人の信仰と融合し、かくして仏教の死生観が次第に主導的地位を占めるようになっていった。仏教の無常思想は、日本の厳しい自然環境とぴったり合う。厳しい自然環境の中で人間の生命がいつでも脅かされるからには、希望を永遠に存続すると思われる魂に託すほかはない。浄土宗では、一日も早く濁る世間を離れ、極楽浄土を探し求めることを提唱する。人はいずれ死ぬということは運命となっている。これは嘆かわしいことであるとともに、どのように努力しても変えられないので、受け入れるほかはない。ならば、早くここを離れれば離れるほど、早く楽になることができる。日本人の考え方では、生と死という人間の力では乗り越えられないハッキリと対立する境が、変化する過程において互いが結び合う接点になっている。ここでは、死は永遠の静寂に向かうのではなくして、流転する生に向かうのである。日本人は無常というものを崇拝するため、日本人の目には死も無常のものにうつる。死の流転がなければ、生も起こらない。特に、「虚無」「万物一如」の考え方は日本人に根強い影響を与えている。日本人にとっては、人間万物の生と死は無常のものであって、生が死の始まりであり、死が生の始まりである。死はすなわち完全完璧になるということであり、高尚な芸術であると考えるのである。

## (三) 伝統文化の影響

### 1. 中国の儒家思想

孔子をはじめとする儒家の提唱する「入世（社会進出）」は積極的な人生観であるといえる。生と死にどう向き合えばよいかと尋ねると、儒家は死については言及を避ける。儒家にとっては、生きている現実の世界こそ基本的なものであって、生きている人間こそが優先されるべきものだというわけである。加えて、死とは天命に従うものであり、避けることのできない、人力の及ばない事柄であるとする。すなわち、死後の世界よりも、生きている人間の生存のほうに儒家はより注目している。『論語 先進篇』に、孔子の弟子の子路が鬼神にどう仕えればよいのかと孔子に尋ねたところ、「未能事人、

焉能事鬼？」と孔子は答えた。子路が「敢問死？」とさらに問うと、「未知生、焉知死？」<sup>17)</sup>と答えた。つまり人は全精力を、生を考えることに注ぎ、死について考慮する必要はないと述べている。どのようにしてより良く生きるべきか、が中国の何千年來の人々の基本的な考え方であると言ってよい。このことは中国人の宗教熱の低い原因の一つにもなっていると言われる。生が最高のものであって、命なくしてすべて無し。中国人は意欲的に生命を賛美し、自然界の万物と人間のもつ生命に対して肯定的な姿勢をもっている。また、中国人は生命の価値と人生の理想を重視し、努力と奮闘を強調する。即ち、これは中国文化の「生を重んずる」考え方と実際の生きる姿勢を示した理性的かつ実用主義的な死生観なのである。

## 2. 日本の神道と武士道精神

日本古来の宗教といわれる神道の主な考え方の一つとして、自然界には神性、靈性および生命性が満ちており、人間の生命を特別扱いすることはせず、人間と自然とは平等であることを強調する。神道では「多神論」という考え方をもち、昔から八十萬神、八百万神、千六百万神という言い方もある。自然界には数えきれないほどの神靈があり、山、川、森、太陽、火、雷、動物や祖霊なども崇拝されるべき対象となる。日本の神社には、猫塚、犬塚、扇塚や筆塚などもよく見られる。人間を含む自然は、神性あるいは靈性を媒介として、神性あるいは靈性によって繋げられた生氣あふれる生命体なのである。人間の生命が特別なものではない以上、死を気にかける必要もない。世の中のすべてのものは生と死の間を繰り返し絶えず廻るものなので、人間も生に拘ったり、死を懼れる必要もない、という考え方は根強い。

神道のほかに、日本をもっとも代表する伝統文化として武士道精神がある。武士道は神道、仏教、儒教の思想を吸収し融合して日本における特色ある思想体系となった。新渡戸稲造は『武士道』の中で、「他のいかなる宗教からも教わらないような、主君に対する忠誠心、祖先に対する敬意、親に対する孝心などの考え方は、神道の教義によって武士道へと伝えられた。これによって侍の傲慢な性質に、忍耐力や謙讓心が植え付けられることとなった。」と述べている。神道のほかに、仏教もまた武士道の精神に豊かな栄養素を注入した。新渡戸はさらに言う、「仏教は武士道に、運命を穏やかに受け入れ、運命に静かに従う心をあたえた。具体的に言うならば、それは危難や惨禍に際して常に心を平静に保つことであり、生に執着せず、死と親しむことであった。」<sup>18)</sup>と。そして、儒家思想もまた武士道のもっとも豊かな源となる。儒家思想の忠孝礼義はいずれもみな武士道の道徳の規範になっている。歴史的に見ると、武家時代から侍は絶対に主君に服従し、名誉あるいは義理のために命を捨てざるを得ないときには、躊躇せずに切腹をすることが求められた。武家社会が発展するにつれて、武士道はしだいに日本社会の精神的な支柱となる。それにともなって、死を重んじ生を軽んずる死生観が形成されるようになる。このような精神は現代まで続いており、今日の日本社会における自殺率が高く下がり

17) 論語・先進：「人に仕えることもできないのに、どうして神靈に仕えられよう。」「恐れ入りますが、死のことをお訊ねします。」「生も分からないのに、どうして死が分かれよう。」の意。

18) 新渡戸稲造. 武士道. PHP文庫. 2005.11.



ない要因の一つになっているのではなからうか。

## おわりに

死生観について、中国語では「生死観」といい、日本語では「死生観」という。この言葉ひとつをとっても、中国人と日本人の視点の違いが如実に現れている。小論は日中の死生観の比較研究を通して、日中の文化的相違とその特質を浮き彫りにし、双方の文化の本質を考究することに意を用いた。考察結果の論述としてそれぞれの際立つ部分が突出したがゆえに、偏りの感があるかもしれない。

一方、21世紀に入り、グローバル化の波とともに世の中がさらに激動化するに及んで日本の社会においても伝統的価値観から離れたさまざまな意識や価値観が人々の間で出現している。例えば昨今の日本では孤独死・縁切り死・無縁化が増え、散骨、樹木葬も進み、さらには家族葬など、葬儀方式ひとつとっても怒涛の如く多様化している。この死をめぐる文化意識の変容に現れる如く、日本人の死生観に至っては一元的に捉えることが全く難しい時代になっている。また社会主義中国においても昨今、種々の宗教思想団体の復権と活動が活発化しており、例えばキリスト教信者は今や一億人を超えると伝えられる一方、中央政府は伝統文化の儒教による精神教育の推進を提唱している。このような世相の多様化と変容のゆえ、小論では、日中の死生観については主として一昔前までであった伝統的な一般的考え方や旧来の風習を中心に論述した。筆者の管見にして及ばざるところは、広く江湖の御斧正を切に請う次第である。

(戊戌 中秋節)

## 参考文献

- 大森太良、日本神話の起源、角川書店、1961  
本田義憲、日本人の無常観、NHK ブックス、1968  
丁秀山、中国の冠婚葬祭、東方書店、1988  
相良亨、日本人の死生観、ペリカン社、1990.6  
清水徳蔵、日中の死生観比較考、アジア研究所紀要17.1990  
五来重、葬と供養、東方出版、1992.5  
和辻哲郎、日本精神史研究、岩波書店、1992.11  
宮坂いち子、古代日本人の死生観、聖徳大学研究紀要、人文学部1997第8号  
立川昭二、日本人の死生観、筑摩書房、1998.6  
伊藤益、日本人の死—日本的死生観への視角—、北樹出版、1999.10  
孫勝強、中国人と日本人の文化的異質性、長崎国際大学論叢、2001第1巻  
山田慎也、現代日本の死と葬儀、東京大学出版会、2007.9  
伊藤雅之、若者の死生観、愛知学院大学文学部紀要第37号、2007  
諏訪春雄、東アジアの死者の行方と葬儀、勉誠出版、2009.7  
村上興巨、葬儀習慣の変化と個人、智山学報、第六十一輯、2012  
山田慎也/鈴木岩弓、変容する死の文化、東京大学出版会、2014.11



- 島田裕巳. 日本人の死生観と葬儀. 海竜社. 2016.5
- 河原昌一郎. 日中文化社会比較論. 彩流社. 2018.6
- 李书成. 论日本人的忧患意识. 日本语言文化论文集. 1998
- 孙晓柳. 论日本人的无常观. 安阳工学院学报. 2008.1
- 王炜. 简论日本武士的死与名誉. 日本学刊. 2008.2
- 李兆忠. 日本人的樱花崇拜. 世界知识. 2008.7
- 蔡艳艳. 从切腹看中日两国生死观. 群文天地. 2008.9
- 井利. 物哀和日本人的生死观. 东京文学. 2008.10
- 汤春苹. 从《失东园》透视日本人的生死观. 南都学坛. 2012.7
- 刘岳兵. 日本的宗教与历史思想. 天津人民出版社. 2015.1
- 李伯森. 中国殡葬史. 社会科学文献出版社. 2017.6